

ヒューム外相とのハンチング

池田 芳藏

今から十八年前の一九六三年九月、大平さんは池田内閣の外務大臣として、日英定期協議に出席のため英国を訪問されたが、時の英国側の対応者はマクミラン内閣のヒューム外相であった。ヒューム卿は、この直後、首相になった人で、スコットランドに強大な選挙地盤を持つ保守党の大物で、同時に同地方屈指の名門旧家の出であり、広大ないわば彼の領地である山野で、時あたかもシーズンの真最中であつたグラスウス（雷鳥）の狩猟に招待したのであつた。当時の駐英大使は大野勝己さんで、私自身はロンドン支店長を命ぜられ、六月に着任した許りであつた。大野氏も名うての鉄砲打ちであり、この招きに同行されたのはいうまでもない。日取りは忘れてしまつたが、到着後のある日、ロンドンの新聞紙上に、大平さんを中心とする鉄砲打ちの面々の写真が大きく掲載され、大平さんは立派ないでたちをしておられ、新聞はベスト・ドレッサーであつたと書いていた。ところが、鳥打ちの方は、「どうにもやることなすことすべてうまくゆかず、ついに一羽も獲物はなかつた」と爽やかな率直さ（Pleasantly Honest）で語つた、と註釈がついていた。大平さんのお人柄がしみじみにじみ出ている話のよつに思われ、不思議に何時までも忘れられないのである。数日後、ロンドン日本人商工会議所のメンバー諸君に代つてヒースロー飛行場にお見送りに行つて、グラスウス打ちの話をしたら、憮然とした面持ちで、寒かつたので、痛風が出て弱つたよ、といいながら、不自由そうな足取りをされていたのが記憶に残つてゐる。

さて、その後十数年経つて、総理になられた大平さんとある会合の時、お近くに席を与えられたので、その時

のお話をしたら、鳥打ちに招かれたので、出発前にあるテパートで装束一式を新調した話をされ、また、古ぼけたハンチング・キャップをかぶったヒューム外相の鳥打ちの手練の程を手にとるように述べられた。狩猟のあと、家族総出のディナー・パーティーに招かれた時、ヒューム郷をはじめ家族の人々が、一見粗末な服装、例えばヒジにつぎの当った上衣を着ていたり、狩猟の時の古ぼけたハンチング・キャップといい、ああいうのをイギリス流の見栄（English Vanity）というんだよといわれたのに、私は大平さんの英語に関する並々ならぬ素養の深さに接したような気がして、ひどく感銘を受けた覚えがある。

大平さんが総理になられて間もなく、我々グループの社長の会合である二木会のメンバーを中心として、総理との対話を目的とする会を企画した時、その名称をどうするかということになり、私から終戦の詔勅にある「万世の為に太平を開く」から太平を取って太平会としたら如何と提案したところ、その時出席されていた総理から、太平会は他に類似名の会合があるので、万世会とされたしという発言があり、そのように決定した。万世会には、ご多忙を割いて数回ご出席頂いたが、女性大臣任命が話題になった時、「組閣するのは、庭園を作るようなもので、あすここにこういう樹を植え、こちらにこういう花木を植え、また、こういう岩をどこに置く」という風に、全体の調和を頭に置いてやるのが大切だ」といわれたのが印象に残っている。

万世のために太平を開かんと欲した真摯一途、人類愛に燃えた政治家、大平正芳氏の急逝は、日本のため、世界のための大損失でなくて何であろう。彼が最後の病床に呻吟しながら、必死に推敲を重ねられたであろう次の詩は、読む者のすべてをして、感涙を覚えしめずにおかぬであろう。敢えて茲に掲げ、冥福を祈るや切である。

得病更知旧友情 明常思長夜之憂

合掌

(三井物産会長)